

2017年在日早慶親善ゴルフ大会実施要項

開催日 : 2017年9月28日(木)
会場 : 茨城ゴルフ倶楽部 東コース OUT-IN 各9:06より
TEL: 0297-58-1216 FAX: 0297-581961

パーティ会場 : 計測器BAR「GAUGE」 秋葉原駅より約200m
https://tabelog.com/tokyo/A1310/A131001/13199532/

参加資格者 : 早稲田大学ならびに慶応大学在校生、OB該当する方、
もしくは、その関係者、知人、友人、夫人、子弟、その他
協議方法 : チーム戦 - 各校上位4名のグロススコアにて決定

賞品&パーティ費 : 6,000円/一人
キャンセル時 : 8月末までに、その旨を通知ください。

注意事項 : 原則、全員が「つくばエクスプレス」利用とします。
9月25日(月)までに、キャディバッグ、ポストンバッグ、
その他を宅配便で発送してください。
協賛依頼 : 協賛品、協賛金を募っております。

連絡先 : 康 泰鎮 (松原 泰男) 090-3202-2063
安 昌煥 (安本 昌煥) 090-3105-6547

みなさま、奮ってご参加ください!

編集後記

7月3日、朝から台風に見舞われた熊本におりました。福岡の友を訪ねた後、妻の実家にご機嫌伺いに足を伸ばしていたのです。台風3号が過ぎ去った午後、予定通り台風を追い越して羽田に帰ってきました。やれやれと一晩過ごした翌日からあの豪雨です。被災された方、身近に被災された方はいらっしやいませんか?この日本では、常にどこかで誰かが「避難」を余儀なくされています。自然災害に晒された人を救助するため、自衛隊はその度に出勤しています。憲法を変えて自衛隊を軍隊と認めたところで戦争する暇が一体あるのだろうか、ニュースを見ながらそんなことを考えました。「こんな人たちの一人である私の声など、「負けるわけにはいかない」と驕り高ぶる裸の王様の耳には入らないのでしょうか...」

(編集:朴魯善)

会計報告

●年会費5000円と賛助金のお願い●

今年からゆうちょ銀行の払込取扱票による送金手数料は会員負担となりました! 一般の金融機関ATMからの送金もできます! ATMからの送金時の支店名は「ゼ」から入力して下さい。当会の運営は全て皆様のボランティア、年会費、賛助金で成り立っております。皆様のご支援をよろしく、お願い致します。

銀行名 : ゆうちょ銀行
支店名 : 019(ゼロイチキュー)
預金種目 : 当座預金
口座番号 : 0037085
口座名義 : ワセダイガクウリオモンカイ

●収支表●

Table with financial data for 2016年4月1日~2017年3月31. Includes sections for 収入の部 (A), 支出の部 (B), and 収支 (A-B) with various sub-items like 前年度繰越金, 年会費, 賛助金, etc.

●年会費・賛助金、ご芳名●

List of names and amounts for 2016年4月~2017年3月. Includes names like 金君夫, 梁直基, 李春夫, etc., with amounts ranging from 5,000 to 230,000.



早稲田大学ウリ稲門会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-1-5
メトロシティ神谷町5階
東京神谷町総合法律事務所内
woori-tohmon@tkm-law.com
発行人 : 河 相淳(編集:編集委員会)

第28号

INDEX

- 1.ウリ稲門会2017年度総会開催
新会長に河相淳学兄
●河新会長からのご挨拶
●畑恵子理事からの感謝状
●新幹事団の紹介
2.ソウル支部だより
3.Life in Venice
~ヴェネツィア紀行
留学中の後輩を訪ねて~
4.当会行事のご案内
●2017年第3回在日慶OB・OG親善ゴルフ大会
●2017年納涼会・奨学生証授与式
5.会計報告
6.編集後記

2017年度総会開催
新会長に河相淳学兄

韓国で新大統領が誕生した直後の2017年5月14日、春と初夏の合間の穏やかな日曜日に、早稲田大学ウリ稲門会もリーガロイヤルホテル東京で総会を迎えることとなりました。



総会の一コマ

総会の冒頭、奨学金事業を立ち上げ、それをスムーズに制度化するため、二期にわたって会長職を務めた金君夫学兄が最後の会長挨拶に立ちました。会長はその中で、「奨学金」に込められた各会員の熱い想いにあらためて感謝を表し、この制度を今後の当会発展の起爆剤にして欲しいと後進にタスキを託しました。文一陳・呉世一両顧問が議長に選出されて議事はスタート。活動報告と会計報告の承認を経て会長を始めとする幹事団が退任、新会長が選出される運びとなりました。そして、前執行部から推薦を受けた河相淳前副会長が満場の拍手に包まれ選任され、登壇して所信を披露しました(所信表明は後ページに掲載)。

総会終了後の懇親会は、河新会長のあらためての挨拶で幕を開け、続いて母校からの来賓、ダイバーシティ担当の畑恵子理事にご登壇いただき祝辞を頂戴しました。さすがダイバーシティ担当理事だけあって、畑先生のお話に参加者の多くが聴き入り、感銘を受けていたようです。いささか固かった雰囲気も金博夫監査の乾杯のご発声の後はずっかり和らぎ、世代をまたがる同窓会の本領が充満します。お酒とともに久しぶりに顔を合わせる学兄の会話も進み、すっかり心持ち良くなっ



早稲田大学ウリ稲門会 李政美さんのミニコンサート

た頃合いに李政美さんのミニコンサート。「イムジン河」も「京成線」も沁みる名演でした。慶應の同窓会であるコリア三田会の玄東實会長、高麗大学同窓会の尹健人副会長からユーモアたっぷりの祝辞をいただき、恒例となった母校学生部 関口八州男学生生活課長のエール交換で懇親会は締められました。

しかし、5月の日は長く外はまだまだ明るい。当然のごとくに2次会となるわけですが、会場は変わらない昔つかしい金城庵。座敷で盃を交わり、順番に一人ずつ立ち上がって思うところを開陳する、「いやあこれが早稲田だよなあ」と微笑を禁じ得ない1日となりました。



エール交換

河相淳新会長の就任挨拶

新会長となりました 河相淳です。宜しくお願致します。まずは、会長としての所信を簡単に4点述べさせていただきます。

第1に、広く開かれた集まりにします。

当会はさかのぼれば 100 年以上の歴史を持つ在日コリアンの同窓会です。国籍、大学の卒業有無や資格にとらわれることなく、また学部生、大学院生、各種研究所といった修学状況如何にかかわらず、原則、早稲田で学んだコリアンであれば、誰でも参加することができます。風通しの良い会にしたいと考えています。

第2に、純然たる「親睦会」という大原則を堅持します。

私達の日コリアンは、本国が分断しているという状況や、日本に住んでいるということから、様々な意見や心情を持った方が集まっています。こうした状況は認めつつも、当会は、思想、政治信条、宗教の違いを超えて親睦をはかる集まりです。日常生活で立場が異なる方でも、当会に集まった時には立場を超えて、仲良く親睦することだけを目的とします。当会は純然たる「親睦会」であり、それ以上でも、それ以下でもありません。

第3に、当会の継続発展に努めます。

同窓会として有意義に、楽しく親睦を図ることは当然ですが、次に重要なことは、この集まりを次世代に引き継いでいくことです。現在、発足3年目をむかえた奨学生制度や各種懇親会等、在校生への物心両面での援助・支援を心がけています。そして、在校生・新卒の皆さん皆さんが社会人となったら、今度は後輩達のために何ができるかを考えてあげてください。まずは、年会費の5000円からお願いします。また、可能ならば、ボランティアも是非お願いします。当会の継続のためには、皆さんの年会費とボランティアが不可欠です。

第4に、集団運営体制をとります。

私は凡人で、特に秀でた存在ではありません。従いまして、顧問等の先輩方のご指導を得ることは勿論ですが、幹事長、副会長等の幹事会での協議を尊重しながら、作業分担をして会の運営を行います。

最後に皆様方のご支援ご協力を切にお願いし、新会長の挨拶とさせていただきます。皆で楽しい会に行きましょう!

ソウル支部便り

金協一ソウル支部長

初めてソウル支部便り送ります。と、言っても特にこちらに元々支部があって会員がいるというわけでもなく、私はこちらにいる為に出来た支部ではないかと思われませんが、これから会員が増える事を期待します。私は韓国に暮らして初めて早くも10年になりますが、私が来た頃は、理工学部の李榮一先輩が居られて、数年間に亘りこちらの校友会との橋渡しをされていました。私はこちらに来た頃から、韓国校友会とウリ稲門会の交流が活発になり、当時ウリ稲門会会長であられた故安王錫元会長がウリ稲門会としては初めて韓国校友会の総会に参席されて、それ以来相互間の交流が活発になりました。その後、私は欠かさず校友会の総会に出席させてもらっています。

年暮らしてとても問題であると思うのは、権威主義がとても強いことだということです。よく



娘の中学校の卒業式



平昌(ピョンチャン)にある白龍洞窟で

韓国で使われる言葉で、甲乙関係、即ち顧客が“甲”でそこと取引をする業者が“乙”という立場にあると、甲は乙に対して絶対的な立場にあると言うことです。それを“甲質(カップル)”という言葉で表現されますが、まさにその関係が、韓国社会には蔓延していると感じます。そうした関係、及び大企業優遇の経済政策を改善すると言う意味で、第18代大統領選挙の時から候補者が、選挙公約として掲げていた“経済民主化”というスローガンがありますが、残念ながら言葉のみが先行して、未だ実現には至っていないと言うのが、私の実感です。しかし、昨年暮れに発覚した崔順実ゲート事件に端を発した政権交代により第19代大統領に選出された革新系の文在寅政権に、この間の保守政権時代にもたらされ山積した社会矛盾を解決してもらうことを国民は大きく期待しています。また私事ではありますが、前回の報告にも記したのですが、私の父の故郷である咸鏡南道、興南が奇しくも、文大統領の父と同郷であり、近い将来、高齢の父と一緒に故郷に行く事ができるのではと期待している今日この頃です。

こちらに来て1年半経った頃、一度こちらでの生活をウリ稲門会の会報に報告しました。読み返してみましたが、その時の希望と情熱が昨日の如くに鮮明に思い出されます。実際、我々はこちらに来た2007年頃が韓国全体の絶頂期であり、景気も良く物価も日本に比べてとても安く、社会も活気に満ちており、1990年のバブルがはじけて停滞していた日本社会と比べて見ても、とても輝いていた時代でした。しかし、革新政権が保守政権に移行していくのと軌を一にして、徐々に輝きを失い始め、景気は悪くなり、物価も失業率も上昇し、現在では日本と比べても物価はほぼ同等な水準までに達しました。韓国は大手財閥が中心となって韓国経済を牽引しており、日本のように堅固とした中小企業の存在がとても脆弱で、よって韓国経済自身がそうした大手財閥系企業の業績に大きく左右されてしまう傾向があります。また、私がここで10

畑恵子理事からの感謝状

2017年6月吉日

早稲田大学校友会 ウリ稲門会
新会長 河相淳様

早稲田大学理事
畑 恵子

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
平素は、母校ならびに校友会のためにお力添えを賜わり、深く感謝いたしております。また新会長として貴会のご発展ならびに母校・校友会のためにご尽力いただけることに感謝申し上げます。さらなるお付き合いの程よろしくお願い申し上げます。
さて、ウリ稲門会懇親会の際には、学生部 関口ともども、ひとかたならぬご接待にあずかり、衷心より厚く御礼申し上げます。また、結構なお土産まで頂戴いたしまして、感謝に存じます。
幅広い世代が集い、在学生との交流を目指し、多くの在学生が出席していることは素晴らしい取り組みかと存じます。
今後とも本学は、世界の教育、世界の研究をリードする“Wasoda”を掲げるため、Best Education, Best Research, さらにBest Communityを旨として、世界スタンダードにおいてあらゆる分野で“the Best”の実現に向けて、ますますの努力を続けてまいります所存です。
共に大学を育てるという視点から、精神的あるいは物質的な幅広いご支援、ご助力をいただければと存じます。
校友会では、校友会奨学金をはじめとする母校・在学生支援費は約2億6千万円にのぼり、より一層の支援に取り組んでいます。また、ご利用金額の0.5%が学生の奨学金として大学へ還元される「早稲田カード」の奨学金累計は18億4千万円を超えました。加えて、「早稲田カード」は2015年4月より一般カード本人年会費が無料となっております。貴会におかれましては、会員皆様方の校友会費納入促進や「早稲田カード」の入金促進にご協力をいただければ幸いです。
本年ながら、貴会の上すまますの発展と貴会のご発展を心より祈念し、御礼の挨拶を申し上げます。
早稲田大学 〒116-8501 東京都文京区本郷2-1-16 敬 具

新幹事団の紹介

- | | |
|--------------|--------------------------------------|
| 顧問 | 梁直基 姜徳相 琴栄吉 李善淳
文一陳 呉世一 金君夫(直前会長) |
| 会長 | 河相淳 |
| 副会長 | 朴淳澈 尹正淳 崔相敦 |
| 幹事長 | 朱茂 |
| 副幹事長 | 徐富男 |
| 監査 | 金博夫 李宇海 |
| ゴルフ部 | 部長 安昌煥
副部長 康泰鎮 金明煥 |
| 関西支部 | 支部長 康政植 |
| 中部支部 | 支部長 車剛一 |
| ソウル支部 | 支部長 金協一 |
| 青年部(在校生対応兼任) | 部長 朴魯善 |
| 財政委員 | 梁直基 琴栄吉 金君夫 徐東潤
李春夫 |

(順不同)



Life in Venice

～ヴェネツィア紀行 留学中の後輩を訪ねて～

朴魯善

漆黒の夜に浮かび上がるサン・マルコ大聖堂、抑制されたライトアップに荘厳さもいや増す。未踏の地に立ち、未知の光景を前にして、感情は昂る。しかし、その高揚は言葉になることもなく、私はただ笑うばかりだった。



夜のサンマルコ大聖堂

海を越えて日本の外に出るのは8年ぶりのことだった。2009年にロンドンを訪れてからというもの、韓国にすら渡っていなかったのだ。

2010年の9月に母が倒れ、それから1年を過ぎた初冬に90年に及んだ天寿を全うし、またしてもそこから3年と少しがたった2015年の1月、もうそろそろ96歳になろうかという父が、体調を崩したかと思いきや、せっかちな性格そのままにそそくさと旅立っていた。このおおよそ5年半にいたる月日の間、私たち夫婦は二人で両親を「看取って」いた。旅行好きにかけては人後に落ちないと自負する私たちであるが、この間の目的地は自ずと「連絡がつき何かあったらすぐに東京に戻れるところ」となり、それを積み重ねた結果、ストレスも少ないけれど刺激も想像の範囲、そんな適度な旅にいつしか充足するようになっていた。ヴェネツィアにたどり着くには、ささやかな「飛躍」が必要だった。

現在の早稲田大学には、学部での共通言語を英語とし、さらに日本語を母語とする学生には1年間の留学を必修とする、国際教養学部という学部がある。昨年の5月くらいのことだろうか、当会奨学生で国際教養学部2年(当時。現在は3年生)の金主栄さんと宗倫さんに軽い世間話のつもりで「どこに留学するのか」と尋ねた。金主栄さんは「北京」と答え、宗倫さんは「ヴェネツィア」と返した。

“それは旅へのいざないだった。それ以外のものではなかった。しかしそれが発作的に現われて、情熱に、い

や錯覚にまで高められたのだ。”

“それとわかってみれば至極当然だったとはいうものの、その時はわれ知らず驚きつつ、自分が本来どこへ行くべきであったかを悟ったのである。一夜にして、比類なき幻想的な異国情緒に浸ろうと思うならば、一体どこへ行くべきだったか。それはいわずと知れているではないか。自分は実はあそこへ旅行しようと思っていたのだ。”

トーマス・マンの小説「ヴェニスに死す」(イタリアの名匠ルキノ・ヴィスコンティ監督が1971年に映画化「Death in Venice」)の主人公アッセンバッハが、旅への憧憬をかきたてられたあげく彼の地が脳裏に浮かび、いても立ってもいられなくなった心情を語る一節である。そういうことなのだ。

予期せず現われた「ヴェネツィア」という地名に、「発作的に」旅への「情熱」は呼び覚まされ、アート・ビエンナーレ開催年にあたることを口実にしながら、後戻りできない「錯覚」にまで発展する。イタリアに行かなければならない!ヴェネツィアが呼んでいる!私は「冒険」を渴望していたのだ!ここまで頭に血が昇ってしまったら、もう手は施せない。「冒険」といっても、実のところは30歳以上離れた後輩に頼りきることを前提にした、著しく虫のいい「冒険」であるのだが、そんなことに気づきはしない。



アカデミア橋から

とはいえ、自宅からサン・マルコ大聖堂までに要した時間はおよそ21時間、「冒険」と呼ぶにふさわしい長旅だった。羽田からパリのシャルル・ド・ゴール空港へ、ドキドキしながら飛行機を乗り継ぎ、ヴェネツィアのマルコ・ポーロ空港で現地時間20時くらいに宗倫さんと落ち合う。そこから一緒にバスに乗り、車の乗り入れが禁じられている水の都に達してからは水上バス・ヴァポレットに乗り換える。水上から暮れなずむ背闇の向こうに世界遺産を垣間見つつ、ようやくのことホテルに荷物

をおろし、夕食をとるため町に出る。「合図するまで絶対に振り向かないでください」と若い後輩に厳命されるがまま、きよろきよろすることなく従順にサン・マルコ広場を横切り、「はい!」と号令されて微笑ましく回れ右をする。真正面には煌めくサン・マルコ大聖堂。立ち止まったのは広場の中心で、つまりはヴェネツィアの中心。その名の通り広々とした広場の真ん中で、見渡す限り歴史的建造物に囲まれ、感情の昂りを抑えることができないまま、私はただただ笑みを浮かべて「比類なき幻想的な異国情緒」に包まれていた。



朝のサンマルコ広場から

「ヴェネツィアは、陸地から4キロほど離れたアドリア海のラグーナ(潟)に浮かぶ118の小さな島からなっている。島々の間を道のように運河が縦横に走り、400もの橋がこれをつないでいる。(中略)2000年近く前に、無数の杭をラグーナに打ち込んで作った人工的な都市が今にいたるまで存続し、しかも1100年にわたって独立し、『アドリア海の女王』として繁栄を謳歌してきた都市国家であったというだけでも驚異であり、蟹気楼のように海に浮かぶ都市や運河に映える建築群といった幻想的な景観は誰をもひきつけてやまない。」予習のために読んだ岩波新書「ヴェネツィア 美の都の一千年」(宮下規久朗著)にそう書かれていた。

そこかしこで見かける傾いた建造物を横目に、乳母車と車椅子以外の車が禁止された(商品の輸送はもちろん船だし、急病人ももちろん船)入り組んだ迷路のような路地を歩いていると、歴史の重みは唐突に姿を現わす。ヴェネツィアは東西約45キロ、南北0.5~2キロと広くはないのだが、教会や同信会館(信徒たちの集まりである同信会の社交場。同信会は名の通っ



ティツィアーノ作「聖母被昇天」

たものだけでも50を超えていたという)が、その小さな町のいたるところに存在する。15世紀から16世紀の名画・名作を擁するそれら歴史的な建造物に流れる空気は、華々しくも厳かで、信者ではない私にとっても「神聖」なものであった。その最たるものがサンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ教会であったし、それと並ぶサンタ・マリア・グロリオサ・デイ・フラーリ教会の主祭壇画、天才ティツィアーノの「聖母被昇天」はヴェネツィアを代表する名画だ。信心深さは美術の母体となり、常に美術制作を促す。都市の繁栄とともに同信会(スクオーラ)が競い合い、町には美術品が溢れかえる。一方で、交易都市であるこの町は、繰り返し何度もペストに襲われ、その度に多くの人口を失ってきた。それをやり過ごすための信心と、低く垂れ込めた闇が去った後の純潔を必要としたのだろう、その記憶が町の隅々に沈潜して今日に至っている。世界に先駆け、アート・ビエンナーレ(2年に一度の国際美術展。現代美術の祭典)を1895年に始めたのも、祝祭空間を必要とするヴェネツィアの特質によるものと思う。



ビエンナーレ会場

私たちは連れ立ってビエンナーレに2日出向いた。私たちとは、もちろん私たち夫婦と、この夫婦が宿泊していたスキアヴォーニ河岸のホテルからたまたま歩いて20秒のところに住んでいる宗倫さん、そしてビエンナーレを観るために、たまたまこの時ヴェネツィアにやって来たロンドン留学中の彼女の同級生・白山立樹くん、この4人だ。学生は驚くほどの低料金でEU内を移動でき(その金額を聞いて本当に驚いた)、同級生が各地に散らばる彼らは、その特権を謳歌してお互いを頼りながら行き来し、見聞と交流を蓄積している。もちろん、彼らばかりが学生なのではないから、現地の学生は概ねそうしているのだろう。ヨーロッパで排外主義が結局は蔓延するに至らない理由に触れた気がした。東海道線の鈍行で、一晩かけて東京から大阪に行ったことをなつかしい思い出として語る我が学生時代と比較するとき、「隔世の感」という言葉ひとつで片づけてはならない深慮がそこにはある。兎にも角にも、観光地ゆえに物価が高いヴェネツィアで、厳しい留学生活を送りながらも、様々な国の友人たちと苦楽を共にしながら成長している後輩の様子は、眩しく喜ばしいものだった。

ビエンナーレに話を戻そう。会場はヴェネツィアの東。

のはずれにある市立公園(ジャルディーニ)と国営造船所(アルセナーレ)の2箇所。国ごとのパビリオンや展示場が立ち並び、金獅子賞をかけて競う形式を維持しているため、国の財力や政治力が介入する余地を残すあり方に今日では批判も多く、歴史的使命は終わったという人もいる。だが、私たちは「優劣」に興味はなかったし(金獅子賞受賞作品も、それとも気づかずにチラッと見ただけだった)、刺激的な作品に出会いたいだけだったし、2日もかけているのに全てを見きれなかったその規模に満足した。せっかくだから例をあげると、当時の印刷物を



韓国館の展示

品にはかき乱されたし(しかも作者はクラブの用心棒をしていたこともある女性)、「価値観」を変えられずにいまだ混乱したまま前にのめる国の光景を、暑苦しい労力で表現していたロシア館もおもしろかった。つまり、とても楽しかったのだ。

陽が高い時間帯、国際的観光地ヴェネツィアは人でごった返している。おしなべてTシャツに短パンのアメリカ人、大きな帽子をかぶって笑い声絶えない韓国のおばさんたち、一族郎党でがなりたてる中国人、考えうる限りの団体さんがひしめく。とりわけ人気スポットであるサン・マルコ広場やリアルト橋周辺は、それぞれ京都の清水寺や浅草の仲見世通りに倍の輪をかけて人口密度。それにひきかえビエンナーレ会場は広くてゆったりしている。そもそも興味を共有する人達しかいない。イタリアらしくスタッフも大らかで、楽しそうにおしゃべりに興じていたり、大声を発することに躊躇なく携帯電話に出て歩き回っていたり、我関せずとゆっくり本を読む人もいた。なのに、一線を越えそうな鑑賞者がいると、「NO!」とすごい剣幕で仕事をする。私たち夫婦は、日中はこうしたところ身を置き、早朝や陽が陰ってから人気スポットへ足を向けていた。つまり、とても快適でもあったのだ。



グラッシー宮 ダミアン・ハースト展覧会

また、ビエンナーレ開催期間中は会場だけではなく、町中各所で運動した企画が催され

る。中でも英国人ダミアン・ハーストの個展「Treasures from the WRECK of the Unbelievable」は圧巻で、バジェットも含めたその規模たるや想像を絶していた。かつての「海の税関」を安藤忠雄が改装した美術館ブント・デッラ・ドッガーナと、18世紀のバロック建築グラッシー宮、この離れた2会場を占拠した作品はタイトル通り「難破船アンビリーバブル号から引き揚げられた財宝」。それはあまりにも巨大で、驚くほどの物量で、そしてあからさまに「虚構」だった。風化しているように作られた「新品」で語られる「ニセ」物語そのものこそが「作品」で、そこからは「常識を疑え」「歴史」だって怪しいぜ」と下品にほくそ笑む彼の声が開いてくる。ヴェネツィアは、過去の栄光を物語る歴史遺産、そして最先端の現代美術、それらすべてを融合させて町の魅力としてきた。溢れかえる美術品と、杭の上に乗っているという町の成り立ちとがあいまって、現実でありながら虚構に身を置いているような世界を作り上げてきた。賛否渦巻くスターアーティストの個展は、この町でしか成立しなかった。



ビエンナーレでの後輩たち

この旅行中、片道2時間ほど電車で揺られ、ルネサンスの聖地でメディチ家の都、フィレンツェにも1泊2日で行ってきている。当たり前のことだが、同じ京都とはいえ両者はまるで違う。ミケランジェロも観たし、ダヴィンチの前にも立った。これまた心躍る旅だったが、長くなるのでフィレンツェについてはまたの機会があればということにしたい。ただ、わかりやすく違いを際立てるために、食事について触れておこう。乱暴に言ってしまうと、ヴェネツィアは海鮮で、内陸のフィレンツェは肉なのだ。ヴェネツィアは魚やスカンピ(手長エビ)のグリルおよびフリットが売りますが、フィレンツェはピステッカと呼ぶ牛肉のステーキやトリッパ(ハチノス)の煮込みが名物、フリットもうさぎ。すべからず美味しい。



食事風景

マンマが仕切る食堂で食べたヴェネツィアは忘れられない。ぶっきらぼうな親父に供されたフィレンツェのボルチーニ茸の Pasta も同様だ。明日は日本に帰るといふ晩にヴェネツィアで恐る恐る注文した謎の料理「カニと黒人の麺」も絶品だった。その店の日本語メニ

ューにそう記載されていたのだが、実態は「蟹肉とイカ墨のスパゲッティ」だった。自動翻訳ソフト、まだまだである。

妻への賞賛を込めて「食」にまつわるエピソードをもうひとつ。「必ずやジェラートを食べる。しかもイタリア語で注文して。」この旅に臨む妻の野望のひとつだった。たくさんあるジェラートの中からどれをチョイスするのか、それをカップにいれてもらうのかコーンに載せてもらうのか、コーンを選ぶとしたらプレーンなのかチョココーティングにするのか、日本で画一的なソフトクリームを買うのとはわけが違い、イタリアでジェラートを注文するには自身の「選択」を細密に表明しなければならない。国際教養学部4年、昨年までヴェネツィアに



ジェラート店[SUSO]

留学していた文主雅さんに、美味しいジェラート屋さん、リアルト橋近くの人気店「SUSO」を教えてもらっていた。狭い路地にある SUSO は観光客で溢れている。私たちの前に並んでいた人たちは戸惑ったり、指差したりしながら時間がかかっていた。店員が肩をすくめながら妻に目で語りかける。「決まっているなら言ってみたら」と。



リアルト橋の船着場

妻は堂々と彼女に返した、「ウン コーノ ビスタチオ(ピスタチオのジェラートをプレーンのコーンに載っけてちょうだい)」。意志的できっぱりとした発語に、店員は「このシニョーラはイタリア語で注文したわよ!」と喝采し、狭い店内が歓喜に包まれた。すぐ後ろに並んでいた関西からの若いお父さんに、多大なプレッシャーをかけてし

まったのは申し訳なかったが(奥さんが「あんた、この子たちの分まで大丈夫やろなあ」と詰めていたのが聞こえた)、ジェラートは青臭くて、とても爽やかだった。

6月2日の昼下がり、カナル グランデ(大運河)のシンボル、リアルト橋からマルコ・ポーロ空港行きの船に乗り、私たちはヴェネツィアを後にした。暑かった6泊



ヴェネツィアの路地

8日の旅も終わろうとしていた。宗倫さんは船着場まで見送ってくれた。彼女は留学を終え、9月には東京に帰ってくる。ヴェネツィアは満ち干を繰り返すラグーナの潮とともに今日も日を送っている。じきに沈むから、早く観に行った方がいいという人もいる。ロシアの文豪ツルゲーネフは、「ヴェネツィアを訪れると、幸福な人はますます幸福になり、不幸な人はさらに不幸を感じる。」と書いたそうだ。旅を終えしばらく経った。現地でも撮った写真の整理は終わったが、友人たちと顔を合わすことに、土産話の披露はまだまだ続きそうだ。この文章を綴ることもその一環ではあった。その度に、旅の愉悅が思い起こされ、行って帰ってきたばかりなのに「再訪」という情熱がじりじりと錯覚へと湧き返る。そう感じる事ができるのは、私が「幸福な人」だからか? だとしたら、それは照れ臭くも嬉しいことだ。



筆者夫婦

